

子どもの本

研究会



【私の一冊】

『じょうぶな頭とかしい体になるために』

五味太郎

(ブロンズ新社)
鶴 理恵子



五味太郎さんは、たくさんの絵本を書いています。若い人たちの中には、赤ちゃんの時、小学校に上がる前、小学校に入ってから、五味さんの絵本を読んでもらったり、自分で読んだり、といった経験のある人は、結構多いのではないかと思います。あるいは、大人になって自分で読んだり、親になって子どもと一緒に読んだり…。

私は30年近く前、子育て真っ最中で、子どもたちと五味さんの絵本をたくさん読んで、大笑いしたり、しんみりしたり、色々なことを考えたりしました。

今回ご紹介する本は、絵本ではなく、子どもの疑問や悩み、希望に関して答える「悩み相談室」の回答集のようなものです。子どもの悩み相談室？と思われるかもしれませんが、案外きちんと自分で疑問を突き詰めてこなかったこと、大人に尋ねたけれどはぐらかされたこと、自分の将来のことを考えようとして途中で答えが見つからなくて考えるのをやめたこと、大人が読んでも思い当たること、少し苦い気持ちになること、そうだったと納得すること、色々あるのではないのでしょうか。私は、改装版が出た後に、だいぶ大人？おばちゃんになってから読みました。私はふだん大学教員をしており、授業では様々な専門書を学生たちに紹介していますが、時々あえて、大人になりかけの大学生にとって、意識しないと出会いにくい、そんな本を紹介しています。その中の一冊がこの本です。

改めて一つ一つ、きちんと考えていくことの大切さを思い出してほしい。「そんなの当たり前」「考えてもしょうがない」などと「思考停止」をしないでほしい。

タイトルは、『じょうぶな体とかしい頭になるために』ではありません、じょうぶな頭とかしい体、そこが大事なところでです。

最後に、五味さんの本ではありませんが、思わずにやり、あるいは大笑いしてしまう、似たような本をもう一冊。おかわりか作の『よい子への道』（福音館書店、1995年）。やはり子どもたちも私も大好きだった本です。



(専修大学人間科学部教授)

連続公開講座「日本の昔はなしを読む」

事前学習会報告

テーマ 絵本『ねずみのすもう』の比較

日時 5月15日(水) 10時～12時

会場 熊本市立図書館集会所

参加者 15名

担当 堀畑真紀子



「ねずみのすもう」は「鼠浄土」(地下にある鼠の樂園を訪ねて財宝をもらってくる昔話)から派生した昔話である。この話を古代・中世の論理から①貧乏な老夫婦 ②異界訪問譚の観点で考察する。①「柴刈り」(落ちている雑木や枝を拾う仕事)に着目すると、老夫婦が社会の最下層に位置し、毎日の食べ物にも困る貧窮のどん底にいたことがわかる。②昔話において「異郷譚」と称され、主人公が異界(地下や海底の国)へ行き、そこで歓待され、帰りに財宝を得、此界に戻るという構造となる。古代・中世では、山は異界であり、そこに現れる動物も「山の神の化現だったり使いだったり」する。また、鼠が霊力を持つ動物とされていたことから、異界の山で相撲をとる鼠は特別な存在とされる。そして、爺が鼠の相撲を見ることが出

来たのは、きこり(芝刈り)も含まれる)が「此界と異界を往還することのできる特別な存在」だったからである。①②の観点で絵本を見る。①『ねずみのすもう』神沢利子文・赤羽末吉絵(偕成社)(以下、赤羽版)が荒地地に

素足の老夫婦を描くのに対し、他の絵本は爺が畑を耕すなど、老夫婦の極貧の情景を描かない。

②鼠の相撲の場所は赤羽版が4回とも山。一方、他の絵本では3回目あるいは4回目以降が山ではなく、老夫婦の家となっている。山が異界という認識が希薄となり、異界訪問譚の構造に変化が生じている。古代・中世の論理が絵本に反映しなくなった一つの理由が語りの変化である。絵本の底本は語りである。語りは時代や「語りの場」によって変化するため、古い伝承が抜け落ちていく。二つ目は、絵本が時代の感覚に即して出版されることである。現在、一番人気の絵本は老夫婦の極貧な状態を描かず、痩せ鼠と太った鼠を「ちびねずみとでかねずみ」と表現し、鼠の可愛いらしさを強調している。三つ目としては当時の民話ブームに便乗するために、時代考証をするゆとりがなかったことが考えられる。

〈参考文献〉森正人「宇治拾遺物語瘤取翁譚の



解釈」(『國語と國文学』東京大学国語国文学会編/浅見徹『玉手箱と打出の小槌』和泉書院/『いまは昔むかしは今』3)福音館書店

(報告 堀畑真紀子)

〈参加者の感想〉

ねずみに自分の家の小判を持ち出された長者が、なぜ文句を言っていないのかと思った▼長者が訴える語りもあるが、ねずみがやったことだからという結末。大川悦生版絵本は長者のねずみが「こつそりためておいた」小判を持つてくる▼「おむすびころりん」とつながるところがおもしろかった▼柴刈りの意味をあらためて知った。子ども達にも伝えたい▼昔話の合理性の意味がわかった▼赤羽さんが描いた絵本は、無駄な背景がなく、主人公の動きだけが描かれていて素直に読める。今回課題本に選ばれた理由がわかった▼「ねずみのすもう」を初めて知った。柴刈りやねずみの意味を知ることができた▼昔話絵本は、小さい子ども達に馴染みのない世界を絵で伝えることができる。だからこそ比較して選ぶ大切さ難しさを感じている▼山の神は何者なのかわからないもの、でも尊敬しなければと思った▼家の格差があっても仲良くできるのは現代にもいい話だと思う▼20年前に小



学3、4年生に語ったとき、喜んでくれた▼本
によってねずみのかけ声が違うのもおもしろ
かった▼老夫婦の生活状態が大人として読む
とよくわかる。子どもの頃に聞きたかったお話

■レポーターの堀畑さんより追加コメント

赤羽さんが描いている杵(きね)は上下に動か
す縦杵。他の絵本はすべて現代多くみられる横
杵だが、これは江戸時代以降に使われ始めたも
の。時代的背景が考えられていることがうかが
える。杵についての餅ののび方も大方の絵本では
大きさにのびていて現実的にはありえない。

(報告 古上美智代)

◆3回連続公開講座

「日本の昔ばなしを読む」第1回

昔ばなし概説・ねずみの話「ねずみのすもも」

講師 森正人さん(熊本大学名誉教授、尚絅

大学・尚絅大学短期大学部名誉教授)

◇日時 6月19日(水) 10時~11時35分

◇場所 くまもと県民交流館パレア会議室9

◇参加者 20人

○昔話の位置

昔話とは口承文芸あるいは口承文学の一種。



口承文芸とは、民俗学者柳田國男が翻訳、提唱

した用語で、口頭で伝承され耳で聞く文学や芸
能。そのうち韻律を伴わずに表現されるものと
して、昔話、伝説、世間話がある。今いう都市
伝説は世間話。また、伝説などを含む口承文芸
を「民話」「民間説話」と呼ぶことがあるが、
ここでは昔話と呼ぶ。

参考文献として、『定本 柳田國男集』(筑摩
書房 第六卷「口承文芸史考」「昔話と文学」「昔
話覚書」、『岩波講座 日本文学史』の第16巻
と第17巻「口承文学I」「口承文学II」、石井
正己『図説 日本の昔話』(河出書房新社)。

○昔話の語りの特徴

時を不定の過去、舞台を不定の土地、登場人
物を不定の人または動物としている。類型的な
語りはじめと語りおさめを持つ。

○語り手と聞き手および語りの場

現在は保育・教育、観光などが昔話を聞く数
少ない場。テレビやネット上のサイトにもある
が、本来は3世代同居の囲炉裏端がその場だっ
た。江戸時代の版本『桃太郎昔話』の挿絵では
火鉢を囲んでいる。中心に何かがあつて場が成
立する。改まった雰囲気があり、改まった場が
できて語りが始まる。



民俗学は、昭和の頃まで民俗社会で昔話を採
集して研究してきたが、今日そういう場は失わ
れた。これからは新しい語りの場を必要とする
時代。

○昔話の型の命名・登録・分類・索引

多くの人によって語られ、語り手や語る機会
によって変化する昔話は、研究する上で型に注
目して名称を与え、分類、登録する必要がある。
日本では、柳田が「完形昔話」「派生昔話」の
二つに分け、これに下位分類を施して「桃太郎」
「食わず女房」などと命名した。関敬吾は、国
際的な基準に従って「動物昔話」「本格昔話」「笑
話」に大別して下位分類し、「勝々山」「絵姿女
房の桃売型」などと命名。さらに欧州の研究者
アールネとトンプソンの分類体系に基づくA
T番号を添えている。この分類体系は増補改訂
され、『国際昔話話型カタログ 分類と文献目
録』として小澤昔ばなし研究所から2016年
に翻訳刊行されている。

柳田監修の『日本昔話名彙』(日本放送協会、
1948年)が最も古い。1979年に関の『日
本昔話大成』1~12巻(角川書店)が刊行され
日本の昔話の全体像が一応分かる。『日本昔話
通観』(同朋舎)は地域別に昔話を集めている。



○読み聞かせ『ねずみのすもう』(神沢利子・文、

赤羽末吉・絵、偕成社) : 読み手 西坂治美さん

○『ねずみのすもう』採集例と位置づけ

昔話採集の初期に、佐々木喜善が『聴耳草子』(1931年)に記録し、佐藤義則が『全国昔話資料集成1 羽前小国昔話集』で報告しているが、柳田は型として認定登録していない。関は『日本昔話大成』で「笑話新型三二六」鼠の相撲」として、新潟県長岡市での採集例(水沢謙一の『おばばの昔ばなし』を採録。イソツブ系の「町の鼠村の鼠」の類推形かもしれないと注を付けている。「民話の部屋」とんと昔あったとき)には、山形県「ネズミのスモウ」、新潟県「ネズミのすもう」を音声を添え掲載しているが、採集や依拠した資料の情報はない。

○再話の典拠

最初に再話したのは坪田譲治ではないか。初出は1943年『鶴の恩がへし』(新潮社)の「ねずみのすまふ」。典拠は佐々木の『聴耳草子』だと思ふ。先ほどの神沢・赤羽の絵本と瀬田貞二の『日本のむかしばなし』(のら書店)の「ねずみのすもう」も『聴耳草子』に基づいているのではないか。推定の根拠は掛け声「デ

ンカシヨ」と赤いふんどし。

○採集された昔話の爺様の生業と社会的地位

『聴耳草子』と『日本昔話大成』では爺様は柴刈りに行き、『羽前小国昔話集』では柴刈りが出てこない。爺様の生業と共同体のどのようなところに位置しているかの説明が少しずつ違っている。

○鼠と富について

昔話の「鼠浄土」(鼠の餅つき)、『日本昔話大成』4―八五)は、爺様が鼠から富を授かるが、鼠とは何なのか。室町期から江戸前期の御伽草子「大黒舞」では、大黒天に鼠のようなものが付き従っていることが語られ、御伽草子「弥兵衛鼠」では家に入り込んだ白鼠を大黒天の使いと歓迎。大黒さんは七福神の一つであり富をもたらす神で鼠がその使いだと捉えられている。

歌舞伎の河竹黙阿弥作「鼠小紋東君新形(ねずみのこもんはるのしんがた)」では、後に鼠小僧になるわが子を捨てる時に、鎌倉の長谷寺の出世大黒の御影を添えたとする。大黒天はもとも仏教の神様だったが大国主命と習合した。



〈参加者との質疑応答〉

■村が現世で山が異界、境界を爺様の家と考えた。爺様は山で鼠の相撲を見るが、絵本によっては爺様の家の土間などでも鼠が相撲をとる。現世で鼠が相撲をとることはありえないのではないか。また、鼠は大黒天とのかかわりで神聖な生き物だから異界にいて、爺様と婆様は柴刈りということから社会の底辺にいるが正直者で、昔話では神が宿る存在。だから、異界で鼠の相撲を見ることができたと解釈した。

〔森〕鼠は人間の傍らで生きているから、相撲をとる場所として土間は自然だと思ふ。でも山と爺様の家を対比的に扱うことで、鼠と人間との関係をどう考えるかは、語り手の話に対する姿勢が出ていると思ふ。

大黒天は食堂や台所に祀る。また鼠は台所になかった。戸棚が餅と金のやり取りの場所になっているが、いわば境界であり鼠の世界への通路になっていると考えた方がむしろわかりやすい。

動物の助けを借りて豊かになる昔話は多い。鼠は富をもたらし、白鼠などは特殊な霊力を持っていると尊ばれている。しかし同時に、鼠は厄介な生き物という二面性があることも見て

おかなければいけない。



爺様の生業が柴刈りか農民かは型によって違う。農民の一人か、社会から疎外されているかは、鼠との関係を考えて時に問題になること。

■相撲が神聖なものという認識は昔話の中でもあるのか？



〔森〕 狂言ではよく相撲が出てきて神聖と言えば神聖。本来、相撲はある種の占いだ。力を競って優劣を決め神意をうかがう意味合いがあつたのは事実だが、この昔話にその意識が引き継がれているとは言いがたい。太っている痩せている、強い弱い、金持ちと貧乏、そういう対比の中で語られていると思う。もちろん娯楽でもあつたし、すべて神事に結びつける必要はないだろう。

■山の鼠と家の鼠は生態も人間との関係も違う。昔の人は違いをわかっていたとすると、この昔話は創作的というか人間の考えが介在していると思う。自然に対する感覚が昔と今では違うことも考えておきたい。

■昔話絵本は再話された文章なので、何かを検討する場合は『日本昔話大成』や『日本昔話通観』の原話を確認した方がよいのではないか。

〔森〕 採取された元の昔話から考えるのと再話

された作品から見えていくのとは違ってくる。ただ、子どもの本の研究会としては、再話者たちが多くの資料の中からなぜこれを選んだのか、選んだ上でどういう表現を用いて作品化していくのか考えていく必要があると思う。

■鼠によって富が長者から爺様と婆様に移っている。現在の感覚から言うとおかしいのでは。〔森〕 富についての考え方が違うと思う。普通、富は労働によって蓄えられると考えるが、富はよそからもたらされるといふ考え方がある。これは次のテーマ。



(報告 木村一恵)

報告 第8回 「子どもと大人の読書会」

日時 6月30日(日) 10時〜12時

場所 オンライン会合(ZOOM)

参加者 10人(小学5年生2人▼中学3年生

3人▼大人5人)

司会 興津 暁子



子どもが選んだ本をみんなで読み、自由に語り合う「子どもと大人の読書会」。今回の課題図書は小学生の部が『あたしのおばあちゃん』は、

『プタ』(ニーナ・ボーデン作、こだまともこ訳、童話館出版)、中学生の部が『きみの友だち』(重松清著、新潮社)。『あたしのおばあちゃん』は、プタは、精神科医の祖母と暮らす11歳の少女キヤットが、両親から引き取りたいと言われ、どういう決断を下すかが友だちとの交流なども交えて描かれる。『きみの友だち』は足の不自由な恵美ちゃんを軸にさまざまな子どもが登場し、友だちの意味を考えていく。

【小学生の部】

『あたしのおばあちゃん』、プタ



小学生2人は、面白かった箇所として、キヤットが5歳位の頃、舞台俳優の両親から離れ、おばあちゃんの家で連れてこられたことがいやでたまらず、ノートに「おばあちゃんはプタ」と書こうとしてうまく書けず「おばちゃんわプタ」と書いてしまったところを挙げた。さらに▼プタが最後に「キヤットが大きくなるまでそばにいなきやいけななんだつたら、タバコ、やめなきやね」と言うところに感動した▼キヤットのお母さんはキヤットへの愛情がありすぎて独り占めにしたかと思っている。キヤットのことを考えていないサイテーなお母さん。あだ名をつけるのが上手な(友だちの)ロージーが

好き。校長先生は毛茸、ウィリーは鼻くそウィリーとか面白い——などの感想が出た。

大人からは▼キャットは考えて行動する。その行動力に感心した。両親の家に行ったときも、母親が自分をおもちやのように扱い、理解しようとしないうを見透かす。キャットはプタと暮らすためにロージと弁護士事務所に行く。そんな行動に出たのは、プタへの信頼感と、自己肯定感があるから。物語がユーモアで包まれているのも感心した▼プタはワイルドで魔女のような人と思っていたが、キャットを巡って娘と争いたくないと思うところは意外だった。最後にプタが海でおぼれそうになるシーンを読んで、これからプタを支える側に回るかもしれないキャットは大丈夫かと心配もした▼キャットの行動力が素晴らしい。大好きなプタと暮らし続けるために自分で自分の未来を切り開いていく姿が素敵。日本に比べて海外の児童文学には、この本のように少女を主人公にした自立の物語が多い印象。ウィリーをいじめっ子のままで終わらせなかったのもいい▼家族とは何かを考えさせられた。キャットは愛情に対して不安定な子だと思う。プタが娘である母親のリーザにも愛情を抱くことが我慢ならない。自

分の好きなものへの執着も大切だが、親の気持ちももう少し考えられないとダメ。最後に母親が「おばあちゃんと一緒に暮らして、おばあちゃんのお世話をしてちょうだい」と言ったのは立派▼母親は自分の気持ちだけで動いている感じがした。ウィリーは、やりすぎなところもあるが、あの年頃の男の子は、関心のある女の子にいたずらしがち。めっちゃくちゃ悪い子とは言えない——などの感想が出た。

【中学生の部】『きみの友たち』



中学生から▼時間が行ったり来たりしながら各章で主人公が変わり、人と人のつながりが感じられるところが面白かった。共感できるところがたくさんあった。ブンが小学校時代、転校生のモトに標語で負けて悔しがる気持ちは分かる。心に残っている言葉は、恵美ちゃんから三好君に対し、じゃんけん遊び（ぐりこ）ではグーで勝つても進める数は少ないけれど「ゆっくりにいいじゃん」というところ。それから「一緒にいなくても寂しくないのが友だち」という言葉もあった。これまで友だちの意味を考えたことはあまりなかったけれど、この本には友だちの解釈がたくさん書かれていて面白かった

▼「ぐりこ」の章で三好君がブンから（小学生時代のように）「ブンちゃんって呼ぶな」と言われる。小学校から中学校に上がる時に友だちの態度が変わったり喋らなくなったりするところがある。そういうのは不思議。友だちとの関係が変わっていくのって何だろう……▼ブンとモトの話が印象に残っている。最初はどちらも自分のほうが上だと思いい敵対心を持つけれど、だんだんお互いに認め合って高め合う関係になる。自分もそういうライバルがいればいいなと思った。「はないちもんめ」の章で、由香を連れていこうとする神様に対して、恵美が「由香ちゃんが欲しい！」というシーンは、由香ちゃんにもう一度会いたいと願う恵美の気持ちが痛いほど伝わってきた——などの感想が出た。

大人からは、▼小学4年に転校してそれまでトップだった子からいじめられたことを、ブンとモトの話を読んで思い出した。恵美ちゃんはケガをきっかけに友だちの輪から外れ、由香ちゃんと関係を深めていく。そういう選択をした彼女だから、弟や友だちに対して少し冷めた一言が言える子に育った▼最も感動したのは、「花いちもんめ」の章の「きみ（恵美ちゃん）

は『みんな』を信じないし、頼らない。一人ひとりの子は悪くない。でも、その子が『みんな』の中にいるかぎり、きみは笑顔を向けない」の箇所。これが作品に通底する考え方だと思う。みんなと個人という視点からこの本を読んだ。みんなの中にと、人はその場に合わせる弱さが出る。ただ個人を見るといいところもある。恵美ちゃんの一人であることを厭わない、自分自分だという毅然とした態度に救いと希望を感じた▼友だちとの関係に悩みを抱える子ども達が多い。仲間外れにされると辛いし、友だちがいなくて寂しいのは自然な感情。そういうときにこの本を読んで、こんな考え方もあるんだと救われる子どもがいればいいなと思いつながら読んだ。恵美ちゃんを通じて著者は悩める子どもたちにメッセージを送っている▼恵美ちゃんは雲をいつも見ている。雲を見ることで救われることがあるかもしれない。題名の「きみの友だち」と言っている一人称のあなたは誰だろうと思っていたら、最後の結婚式でこの人かと分かる。こういう形式の物語は初めて面白かった。泣き上戸なので最初から最後まで泣きっぱなしで読んだ。なかでも好きだったのは「千羽鶴」の章。西村さんは恵美ちゃんか

ら『みんな』が『みんな』でいるうちは友だちじゃない」と言われ、思いがこもらない千羽鶴ではダメだと学ぶ。大人でも同調圧力によってまわりに合わせているうちに自分を見失うことがある。それではいけないことを千羽鶴の話が教えてくれた——などの感想が出た。

(報告 横田恵美)



報告 2024年度通常総会

日時 6月23日(日) 11時～11時27分

場所 熊本市現代美術館 会議室

出席者 51名(うち評決委任者39名)

正会員 60名 本総会は有効に成立

小川芳宏議長のもと、総会資料に従って以下の審議が進められ、全て承認された。

第1号議案 2023年度事業報告

第2号議案 2023年度活動決算報告

(含む監査報告)

第3号議案 2024年度事業計画

2024年7月以降の会報発行日について、

第4水曜日に当たる7月24日、9月25日、

11月27日、2025年1月22日、3月26日

に変更する旨の報告があった。

第4号議案 2024年度活動予算

◇参加者募集◇

オンライン講座第4回「グリム童話の魅力」

日時 8月25日(日) 10時～12時

講師 竹内識晃(東京家政学院大学非常勤講師・熊本子ども本の研究会会員)

グリム童話を丁寧に読み解き、その魅力を探る講座です。今回の講座では「七羽のからす」(KHM25)を取り上げます。この講座では『子どもと家庭の童話集』から1話を選び、毎回テーマの異なる話を読み進めています。比較民話学の観点から各国の類話と比較し、グリム童話や昔話への理解を深めていきます。さらに、子ども読者の視点でグリム童話の魅力を考えることも目標です。なお、グリム童話のテキストは、お手持ちの翻訳で結構ですので事前に配付します。参加者の皆さまと意見交換する時間もつくりますので、グリム童話を読む楽しさを、ぜひ一緒に味わいましょう。今回はじめて講座に参加される方も歓迎します。

参加希望の方は左記宛に、「グリム童話の魅力・参加希望」と明記し、8月18日までにお申し込みください。

メール zoom@kodomonohon.org

Zoom

申し込みください。

メール zoom@kodomonohon.org



8月 9月の活動の案内

○公開講座 田口祐子さんをお招きして

おはなし会と小道員製作

日時 8月4日(日)

10時～11時半 おはなし会

13時半～15時 小道員製作

場所 熊本市民会館シアーズホーム夢ホール

○公開講座「日本の昔話を読む」第3回

菊地のお話「ぼんざらや」

日時 9月18日(水) 10時～11時半

場所 くまもと県民交流館パレア会議室9

○おはなしボランティア「びわの木」活動

・8月1日(木) 11時～11時半

熊本県立図書館(0歳児)

・8月3日(土) 11時～11時半

熊本市立図書館(3歳以上)

・9月13日(金) 10時～11時

江津湖療育医療センター分教室

・9月27日(金) 13時～14時15分

江津湖療育医療センター分教室

○研究会活動検討会(オンライン)

日時 8月18日(日) 10時～11時

○グリム童話の魅力(オンライン)

日時 8月25日(日) 10時～12時



*オンライン会合に参加希望の方は、左記メールアドレス宛にお申し込みください。

メールアドレス zoom@kodomonhon.org

○「びわの木文庫」貸し出し予定日

8月3日(土)、24日(土)、25日(日)、

9月14日(土)、15日(日)、28日(土)、29日(日)

お越しになるときは事前にご連絡ください。



本はともだち!

日隈忍さん(西原校区協議会会長)にご紹介

いただき、5月16日(木)、西原小学校の学童

「りんどうクラブ」を訪問し、熊本市教育委員

会の西田さんと中村さんを始めとするクラブ

の方々とお会いしました。写真を見せながら、

びわの木文庫のご紹介をしたところ、是非、訪

問し、本を借りたいとのこと。早速18日(土)

にクラブの方々3名がおいでになり、絵本、紙

芝居、漫画を合わせて30冊ほど借りていかれ

ました。ほぼ1カ月後の6月20日(木)に、

また3名の方々がおいでになり、やはり絵本、

紙芝居を30冊強借りていきました。紙芝居

をやると、子どもたちが集中して聞いてくれる

と話されていました。

市立図書館から借りる場合は、借りに行った



方1人あたり10冊、2週間までというルールなので、学童クラブではこれまであまり利用していないとのこと。びわの木文庫だと、冊数に気にせず、1カ月くらいごとに入れ替えできるので、便利とのことでした。私自身が直接学童の子どもたちと触れ合うわけではありませんが、びわの木文庫と地域の子どもたちとの接点をやつと作ることができました。これが継続的な活動として定着するよう、学童クラブの方々との意見交換していきたいと思っています。

学童に来ていた子どもたちを通してびわの木文庫の存在を西原小学校の多くの児童、保護者の方々に再認識していただければ、母が存命中と同様に、文庫に直接来ていただける方も出てくるのではと期待しています。来られる方が増えてくるのであれば、貸出日も増やしていきたいと思っています。



(横田 真)

■編集 金子・上林・横田 《イラスト》安田
特定非営利活動法人

熊本市子どもの本の研究会 発行

〒861-8029

熊本市東区西原1丁目15の24

電話 096(382)5090

